
魔界パイプライン

take12345

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界パイプライン

【Nコード】

N8701Z

【作者名】

take12345

【あらすじ】

村を作ります。

協力者が得られないために奴隷で代用します。

プロローグ

魔界の瘴気で世界中を汚染された世界。

澱んだ空気や死骸から突如生まれる妖魔や生きながら妖魔に姿を変
える人間。

人類の数は減り続け、文明は滅びた。

アベルは普通種で15歳の男である。

瘴気が薄いわずかな土地でひっそりと瘴気解毒の研究を続けていた
一族の1人である。

ある時、亜人種の中でも狂暴な豚種に襲撃された。住んでいた村は
占領され、みんな奴隷にされた。

瘴気の研究の為にたまたま村から離れたところで自分の作った装置
を観察していた時に襲撃が始まり難を逃れた。そしてそのまま研究
を続けながら流浪の旅をしていたのだ。

決して楽ではない旅を続けながら、とうとう瘴気の浄化魔法は完成
した。

第1話 兎種のコロニー

ここは亜人種の兎種が支配するコロニー。エルニドの町。人口4000人ほどの町で瘴気濃度は春と秋の一時を除いて非常に薄く快適といえる。町の南東から南西にかけて瘴気を吸収しづらい雨麦という種類の畑が広がっている。

見た目もほとんど普通種との差異はなく、目が赤く肌が肌と体毛が同じ色をしている。兎族は普通種に対して友好的な態度をとっており、同種に対するのとほとんど同じような対応をしてくれる。

ここで開発した魔法を使って商売し、稼いだお金を使って奴隷を買い、浄化装置を作って人口のオアシス（瘴気が薄く普通種や亜人種が暮らせる土地）を作る。これが、アベルの目的である。

一刻も早く普通種のコロニーを見つけてこの技術を提供し生存圏を広げたいのだが、生まれた村を出てから一度も普通種のコロニーは見つからない。亜人種のコロニーは何度か見つけたが、そこで稀に見掛ける普通種はみんな奴隷であった。

機構を作るには亜人種の労働力でも大きな助けになるのだが、どの亜人種も自身以外の種族には絶対に従わない。よくて穀物や道具の物々交換のような対等な交渉にに応じてくれるだけである。

物々交換にしても対価に労働力を差し出す者はいない。こちらが差し出す分には可能だが、別種の相手に対しては労働力を提供してくれはしなかった。それはたとえ定住しない同じような旅人同士でさ

えも。

例外として圧倒的な力や兵力を持った個人に対してその力を認めただけの場合にコロニーごと従うこともあるらしいのだが。

しかし、アベルは亜人種に比べて魔法は得意ではあるが、圧倒的にはほど遠く、兵力どころかアベルただ一人の戦力である。

せつかく完成した浄化理論もこの世に残す前にアベルが死んでしまえば何世代にもわたった村ぐるみの研究は無駄になってしまう。

かといって、亜人種に教えるわけにもいかない。全ての亜人種に対してではないにしても忌避感をアベルは持っていた。それに村の何世代にもわたった研究の成果だからそのまま最後まで普通種でやり通したかった。

その為には同族の普通種を集めるか、奴隷を買うしか方法はないのである。奴隷ならば種族に関係なく主人の命令に従う。人間族が見つからない以上、奴隷を買う以外に労働力を確保することは不可能であった。

そんなわけでアベルは、エルニドの町で商売を始めようと思うのだが、商売をするにはまず売る場所と売る物がなければならぬ。

そして、瘴気の薄い土地は非常に貴重である。当然売る場所もそこを所有する者に対価を支払わなければならない。売る物も旅をするのに最低限しか持たないアベルは商品になるような物は、手放す事の出来ない貴重な品を除いて何も持っていない。

アベルは街で情報を集め、現在の立場で資金を調達する方法をいくつか知った。

1つ目は、町を見回って売れている野生の植物などを確認し、町のとそで採取。町に戻りそれを売っている店に直接買い取ってもらうか、町の外で売るという方法。

2つ目は、自身を質屋で質に入れ、この町で流通しているガラと呼ばれる鉱石を手に入れてそれを元手に材料を買い、開発した魔法で商品化して売る方法。

3つ目は、町で仕事を見つけ日銭を稼ぐ方法。

4つ目は、商店に加工技術を売り込む方法だ。

3つ目と4つ目はともに兎族の下で働くという点で共通するが、4つ目の場合は、代わりの利かない技術である為、その技術を高く買ってくれるかもしれない。しかし、友好的な亜人種とはいえ、その有用性のために今度は開放してくれない、最悪拘束される可能性をアベルは考えた。

1つ目の方法はやろうとしても稼ぎになるほど採取できるとは限らない、3つ目と稼げる量は大差ないかもしれない。

2つ目の方法は、失敗すればそのまま奴隷に落ちてしまう。

しかし、この技術で資産を稼ぐ自信があった。そこでリスクは高いがリターンも大きい2番目の自身を質に入れる方法を選んだ。

どのコロニーも基本的に流通は物々交換である。それでもそのコロニーで安定した需要があり、保存性や携帯性が高いものが商品の対価の中心になる。このコロニーでは装飾品に使われる透明性のある鉱石がそれで、ガラと呼ばれていた。

ガラの装飾品を中心に多様な商売を手がける兎族のケトラという人の店に交渉に出向いた。

「...というわけで、俺の身柄を質にガラを貸してください」

「確かに普通種の奴隷はとても高い価値があるが、自ら奴隷になるとは…」

「いや、ちゃんと自分を買い戻します。その保障ですから」

「ああ、いやしかしそう簡単に稼げると思っのかね」

店主は胡散臭げにアベルを見ている。外の人間でしかもコロニー支配種族と別種の者がそのコロニーで商売を成功させるのは困難である。普通種は子孫を増やすのに非常に有用な為、比較的優遇されやすいし現にこのコロニーもそうなのだが、支配種族には絶対に勝てない。

まして、自らの自由を質にかけるといふことは、商売を成功させるよりも踏み倒す算段があるのではないかと疑わざるを得ない。

当然、契約の魔法で裏切らせないようにするが、普通種は魔法が得意で頭もいいから、油断するわけにはいかない。

「瘴気病の治療アイテムが作れます。誰もが欲してやまないアイテムだと思えますが。」

「それが本当ならすごいが、今現在確認されている浄化する方法は繭族の瘴気吸収魔法と濁っていない水石ぐらいなものだ。

仮にそのアイテムの性能が本当だとしても誰も信じないんじゃないか？水石ですら効果を見て取れるぐらいになるまでかなり時間がかかるからな」

するとアベルはおもむろにズボンの右に設えた衣囊から金属でできた四角い長方形の小物を取り出した。

そして、一番面積の広い面に親指を載せスライドさせた。すると、その先端の針の先程の穴から暗い炎が点火した。

店主のケトラは珍しそうにそれを眺めた。

「ケトラさん、その左手…」

「ああ、瘡気の毒だ。別に珍しくないだろ？」

「ちよっとその手をこちらへお願いします」

瘡気で変色し不気味な別の生物が張り付いたようなケトラの左腕の

一部にアベルはそのライトの底部と接触させる。

炎はさらに暗くなりわずかばかり大きくなった。

すると、ケトラの左腕の怨嗟がそのまま具現化したような黒色の模様はほとんど周りの健康的な皮膚と大差ない状態になった。

「なっ、ええ?!」

「水石がどの程度のものか見たことないので知りませんが、それにも劣らないものだと思いますが」

ケトラの左手はわずかなくすみを残してその周りと変わらない綺麗な肌になっていた。

しばらく驚きの表情を崩さずに治った左手と目の前の奇跡を起こしたアベルの持つ道具を交互に視線を移した。

そして、2、3回つばを飲み込みようやく話し始めることができた。

「水石と比べるようなレベルじゃない。私は貴重な水石を求めるのに商売で得た資産の大半を費やしている。

それでもこの瘡気病の広がりを抑制するのが精いっぱいだ。

この疼きのせいで、眠れない日もあるぐらいだ。左手を切り落とすとかと何度考えたことか。それをこんな一瞬でここまで奇麗にしてくれるとは…」

それを聞いてアベルは にやりとした。

「どうです、これなら十分商売になるでしょう?」

「これを君が作ったというのか？同じものをいくらでも作れるというのか？これを売ってくれないか？」

ケトラは興奮してアベルに捲し立てた。

「落ち着いてください。もちろん私が作りましたし、同じ材料があればいくらでも作りますが、これの材料は非常に珍しい物なので、これ自体を売ることはできません。」

ただ、恐らく別の普通に手に入る材料を使って、似たようなものは作れます。性能は少し下がりますがね」

「そ、そうか！」

しかし、すごいな。この道具を使って瘴気病の治療だけでも商売が成り立つだろう」

「ええ、そうだと思います。しかし、この道具を売った方がもっと儲かるでしょう？できるだけ早く資金を貯めたいんですよ」

「ふむ、この町に定住でもするつもりなのかね？」

旅人の最終的な目標は定住である。新しいオアシスはそう簡単には見つからない。見つかったも奪われる可能性があるし、オアシス外の土地ほどではないにしても妖魔に襲われる可能性もある。

一定以上の人口を有したコロニーは、長い間オアシス状態であったことこの証であるし、（一時的に瘴気が薄いだけでしばらくすると消滅してしまうオアシスも多い）その人口に比例して戦力の蓄えがあるため襲撃されて奴隷に身を落とす心配もない、妖魔に蹂躪される心配も少ないだろう。

そういうコロニーに定住できるということは、何かしらの理由で流浪を余儀なくされた者たちにとっては憧れでありまた希望なのである。

だがアベルはそれとは少しレベルが違っていた。

「いえ、違います。奴隷を買いたいのです」

「なるほど奴隷か。奴隷は高価だから」

そう言うとケトラは徐に背後の棚から一つかみ透明な宝石をカウンターに置いた。

「瘴気灯、あ、これの名前ですが、売るわけにはいきませんか？」

ケトラは横に首を振った。

「いや、そうじゃない。左手の瘴気病を直してくれた対価だ。奴隷に何を求めているか知らないが、一般的なワーカーとして売られている奴隷ならそれで1人買えるだろう」

「いいのですか？さっき行った治療は、ただのデモンストレーションであなたに信用してもらおう為に行ったことですよ？」

アベルは、商売をする者がこんな気前がよくて大丈夫なのだろうかと思った。

「君が信用を私に求めたように今度は私が君に信用を得たいということだよ。アベルさんだったか？私と継続して取引してほしい。素材の仕入れと住まいはこちらで手配するから、できればこの商品を独占的に取り扱わせてくれないか？」

相手にとって都合がいいのは分かるが、こちらとしても目的に適っている。

最初に自分で提示した4番目の選択肢、技術を売り込むに近いが治

療の対価を見ても分かるように技術をちゃんと評価してくれているし、足元を見るような真似はしていない。最初から非常に良い相手に当たったと言える。

「分かりました。奴隷ももう少しまとまった人数が必要ですのでしばらくお世話になります」

「ありがとう！技術もすごいが、これほどガラ（かね）の匂いがする商品は初めてだね」

そうして、ケトラは、所有する日干し煉瓦の家、旅人に宿屋として提供していたものを一部材料置き場と作業場に改装し、アベルに貸し与えた。独占契約の対価として、である。

アベルの予想通り最初に作った瘴気灯の材料はどれも仕入れることができなかったが、効果の低い瘴気ライターの場合は普通に手に入った。というか、手に入る材料でできるレベルのものをつくったので当然である。瘴気灯と違って油を差さなければならず、何度か使うと壊れてしまう。さらに効果も瘴気灯に比べてかなり弱かった。

しかしそれでも貴重な水石に比べて効果が高かったため、富裕層に飛ぶように売れた。

長年水石を愛用していたため、水石を取り扱う商店の人間とは仲がいい。なので、彼らの取り扱う水石の暴落を避ける為、ただでさえ高い水石よりもさらに高い値段で売った。尋常じゃない利益率を叩きだしていた。

末期の瘴気病にも効果があるため、ほんの少しでも瘴気ライターの

効能に預かりたい者たちが共同して購入することもあった。なので、数秒の瘴気ライターの使用権をばら売りしたところ、購入できる層が広がり、製作者のアベルも販売元のケトラもほとんど富が蓄積していった。

その性能は、コロニー内はおろか、遠方のコロニーからも買い求める客がやってくるほどになった。通常コロニーに立ち寄る者は、根なし草の旅人がほとんどである。

「今日はこれだけ出来ました」

「おお、2日で5つも出来たのか！ありがたい、もう新品の在庫は尽きていてね。使用権をばら売りしている1つでこれもあと少して壊れそうだったんだ」

「いや、ある程度の予想はしていましたが、まさかここまで売れるとは思っていませんでした」

「それだけアベルの発明はすごいってことだな。いまじゃ、このコロニーの有力者のほとんどがお得意様だよ」

ケトラは嬉しそうに湯のみに入った紅茶をすすりながら続けた。

「20リーグ（約111km）も離れた場所のコロニーからわざわざこの商品を買って求めてきた者もいたよ。それもそのコロニーの定住者だよ。」

取引対象はガラだけにしていたんだが、そいつのコロニーじゃ銀とかいう鉱石が主要な交換物らしいんだ。わざわざ詳しいやつを呼んでそこでの食糧とのレートを聞いて、多少相手が不利な程度のレートで取引してやった。流石にそのまま追いつ返すのは悪いからな。そ

れでも奴ら大喜びだったな。しかし、おかげで在庫がほとんど無くなったが」

ケトラの奥さんがカウンターの後ろから出てきて、アベルにお茶を差し出した。

「しかし、銀ですか。そういえば銀も手に入りにくいですね」

「ああ、この住人は金は好きなんだが銀はすぐに錆びるからあんまり好まれないな。みんなきれいなものが好きだから。」

いや、奥さんの方を向いてケトラが続ける

「正確には、兎族の女性が…だな」

「ははは、なるほど」

アベルとケトラはとても仲が良くなっていた。普段は、ケトラが用意してくれた住居で生活し、食事は兎族の出店する屋台で済ましているが、たまにケトラに夕食をごちそうになる。

ケトラには、13歳の息子パリスがいるが、瘴気で内臓をやられていた。

瘴気ライターも瘴気灯もどうやら内臓の疾患に対しては効果が薄いようだった。そこで、アベルは初めて瘴気の浄化魔法を使ってやった。この魔法は自身に取り込む繭族の魔法とは違うが、結構な魔力と集中力があるために、流石のアベルも疲れた。

しかし、このときからケトラの妻エリルも子供のパスリもアベルを慕うようになった。

「ところで、昨日だけで作り方を教わりに来たやつが5人、今日は今朝から2人も来たよ」

何処にもないのに需要は極めて高いものだから当然と言えば当然である。

「ケトラさんは、独占したいと言いましたが、私もいろんな人に広めたいとは思っていません。あと、まだあまり広がって欲しくはないです」

アベルは少し表情を重くした。

「ケトラさんに住居を用意していただいて申し訳ないのですが、そろそろ拠点を変えようと思っています」

それを聞いたケトラは驚いた。

「お、おい、ひょっとして商品売ってくれないのか？」

横で聞いていた妻エリルも心配そうにこちらを見た。

「アベル兄ちゃん出ていくの？」

「うん。もう少ししたら」

今では弟のように慕っているパリスも不安げな表情だ。

「まだしばらくは居ますし、出て言っても商品はこちらへお渡します。」

それに、出て行った後には大量の食糧や日用品をこちらから買い取るようになると思います。」

「ん？大量？それはどういう……」

わずかにアベルは考える素振りを見せた。

ある程度の戦力が整うまで、普通族以外には秘密にするつもりだったが、それだといろいろ不便が起こる。最低限の信用できる人間には話してもいいのではという結論に達していた。

「このコロニーから西の位置にオアシスを作ろうと思うのです」

それを聞いた3人の兔族は困惑した。

当然である、オアシスは見つけるものであつて作るものではないのだから。

「ここから西は濃い瘴気の大地がずっと続いている。とてもオアシスが見つかるようなところじゃないぞ。年に2回の瘴気風もそつちから吹いているし、妖魔の襲撃も大体西からだ、そして西から旅人が来たなんて話は聞いた事がない」

正真正銘瘴気渦巻く人外の土地であつた。

「ええ、だから見つけるのではなくて作るのです。」

「そんなこと、本当に出来るのかね」

ケトラはそう言いながらも彼なら可能ではないかとほんの少しだけ頭の隅で考えていた。

「しかし、借りに出来るとしてもなんでわざわざそんな瘴気の濃い場所を選ぶんだ？そんなところにいたんじゃないやすぐに瘴気病にかかつて死んでしまうだろ。たとえお前さんの作る道具で治してもきりがないぞ。それに妖魔がつようよいるはずだ。おそらく一晩で骨すら残らないだろう」

「ですから、オアシスを作るのです。わざわざ瘴気の濃い場所を選ぶのは、賊を近づかせない為です。瘴気は何とかありますが、賊を撃退する戦力がありませんから。」

「おい、しかし、そんな濃いところに作ることもなんてできるのか？」

「1人ではもちろん無理です。しかしある程度の労働力があれば、可能です。単純な土木作業ですから。設計と術はもちろん私がやります」

ケトラはアベルのすごさは十分理解しているが、それでもこの話は眉唾に思った。しかし、彼はこのために資金を調達し奴隷を欲していることが分かった。なので、彼を止めることはできないだろうと思った。

「なるほど。まあ無理はしないでくれ」

「ええ、ところで奴隷が売っている市はどこら辺になりますか？食糧と日用品の調達以外に市場を利用した事がないので、まだあんまり町には詳しくないんですよ」

「それなら、俺が案内するぜ！兄ちゃん」

「ふむ、そうだな、パリス、アベルを案内してあげてくれ」

「ああ、願います」

パリスはニンジンの揚げ菓子のアベルにおごらせる気でした。

第2話 奴隷購入

ケトラの息子パリスに町の案内をしてもらっていた。

「アベル兄ちゃんは、家の近くでしか飯買わないみたいだけどあの辺はそんなにおいしくないし高いぞ」

この町にきてすぐに仕事と住まいにありつけたためあまり町を散策していなかった。そのためアベルはあまり物の相場をしらない。

「それにアベル兄ちゃん、対価にガラばかり使っているけど、もう少し質の悪いガラを使わないとダメだぞ。家の周りの物価が急騰しているって父ちゃんが嘆いていた」

「ああ、どうもガラの違いがよくわからないというか、価値の違いをいまいち理解できないんだ」

「はあ、装飾品の店に出入りしているのに、その材料の価値が分からないなんて、うちの店まで馬鹿にされかねないよ」

ガラは装飾品に使われる宝石のようなもので、エルニドの町は基本的に物々交換が行われているのだが、その一方でもっとも利用されるのがガラである。

ガラは色や透明度、大きさなどでその価値が変わる為に、ある程度長く住まなければその価値を正確に把握するのは困難である。兎族は比較的正直者が多いが、それでも価値を知らない者は幾らか損をする。

「まあ、もう少し鑑定眼を養うよう努力するよ」

しばらく通りを西に歩いたところで、お目当ての店を見つけた。といってもアベルではなくパリスの店だ。

「兄ちゃん…」

「ああ、分かったよ。ってか、ケトラさんも金持ちなんだからパリスも自分で買ったらどうなんだ？」

「商売人は自分で稼いでなんぼって言うってお小遣いくれないんだよ」

パリスは非常に悲しい瞳をこちらに向けていた。

「分かったから。でもあんまり奢るなってケトラさんに言われているんだ」

「うん。だからこうやって二人で外に出歩いた時しか強請らないだろ！」

「そついえばそつだな」

苦笑しながら得意げなパリスの顔を見た。

お目当ての店は、揚げ菓子を売る店だった。ニンジン一種類だけの食糧はいろいろあるし、兎族も普通族とほとんど変わらないものを食べているのだが、どうも種族全体でニンジンが好物らしく、物々交換でもかなりレートの高い品物だった。

「これで買ってこい。ついでに俺の分もな」

そう言ってポケットから細かいガラをパリスに渡す。

パリスは嬉しそうに店に出来た列の後尾に並んだ。

その店は最近商売替えしたらしく、食品店からニンジンの揚げ菓子だけを売るお菓子屋変わった。それはみごとに当たり、常に何人かのお客が並んでいた。

しばらくして、大きな植物の葉っぱを筒状にしたものにどつき入れて戻ってきた。

「おい、人の金だからっていくらなんでも買すぎだろ」

「だって、さつき渡されたガラどれも超高価なのばかりだぜ。一番安いやつでもこれだけの価値があったんだ」

そう言うと、パリスはさつき手渡された細かいガラを渡した。最初に渡した分からはほとんど減っていないようだったのでパリスの言っていることは間違っていないようだった。

「うーむ、すごく細かいし少し濁っていたからそれほど価値は無いと思ったんだけどな」

「はあ、これだから。これは濁りじゃなくて、この山吹色のガラが持つ模様なの、あとこの色は珍しいから小さくても価値があるんだよ。価値が分からないんだったら、もう少しいろんなのを持つようにしないと」

そう言いながら、一本のニンジン揚げ菓子を掴んで齧りながらパリス商店を案内してもらった。ガラの品質の講義も交えながら店が並んだ通りを抜けさらに西へ向かった先に目的の場所に着いた。

「ここら辺がそうさ」

そこはぼろを纏い首輪につながれた雑多な人種がいた。年齢、見た目、体格も様々で、性別も偏りが無い。

「そついや兄さんどうい奴隷が欲しいんだい？」

そういうパリスはなぜかにやにやしている。

「ワーカーだ。ワーカーならどんなタイプでも構わないが、土木工事に適した奴がたくさん欲しいかな」

「なんだ、性奴隷が欲しいわけじゃないのか」

「お…おい、ケトラさんとの話を聞いてなかったのか？」

「でも今すぐつてわけじゃないだろ？兄さんの資産も相当増えているんだから、性奴隷ぐらい持ってもおかしくないじゃん」

性奴隷はともかく、ハウスキーパーや簡単な雑事を代わりにやってくれる為の奴隷をそろそろ買おうかと思っていた。いずれたくさん奴隷を使役する為にある程度はなれておいた方がいいと思った為だ。

「まあ、後々のために適当に1人ぐらい今買っておいてもいいかと思っているよ」

「そうそう、買えるものじゃないんだけど、まあ兄さんなら余裕だよね」

「ところでこの奴隷たちはどうして奴隷になったんだ？」

「この奴隷は奴隷商人が食料品や装飾品と交換するために連れてきたやつだよ。奴隷商人が何処から仕入れているかは知らないけど、別のコロニーで罪を犯して奴隷に落ちた奴や、賊に襲撃されて奴隷として捕まったやつとか、他には親が食糧の代わりに売られたとかしたやつじゃないか？俺も奴隷商人じゃないから詳しくは知らないけど」

「なるほど、ところで彼らは逃げ出したりしないのか？」

「え？だって首輪していているじゃん。俺も魔法とか詳しくないけど、あれ魔法がかかっていて、その首輪に書かれた名前の人物には逆ら

えないらしいよ。つてか、アベル兄ちゃんの方が魔法に詳しいだろ」
「魔法はいろんな系統があるみたいだからな。村ぐるみで浄化の魔法ばかり研究していたから、他の事には少し疎いんだ」

「まあ、あれだけすごいのが作れるんなら納得だな。ところで、兄ちゃん村つて今どうしているんだ？」

「多分、今でも豚族に占領されてると思うよ」

「ああ、豚族か。あいつら、荒っぽいし集団で行動しているからな。このコロニーも1度豚族に襲われたことがあるって聞いたな。でも、守備兵だけで撃退したらしい」

それをわが事のように誇らしげに語って見せた。
そう言っつて奴隷たちを物色し始めた。

「いらつしゃい、あ、ケトラさんとこの坊ちゃんじゃないですか。瘴気ライター素晴らしいですね。愛用してます。あれのおかげで私の座るのもしんどかった膝の瘴気瘦がほとんど無くなりました。まさかあんなに早く利くとは。おかげでこんなに早く座つたり立つたりできる」

そう言っつて、店主は座っていた椅子から立つたり座つたりを繰り返して見せた。

「ははは、でも俺じゃなくて、この人の付き添いなんだ」

「ほほう、普通種の方ですか、ケトラさんの関係者ですかな」

「そうなんだ、だからガラもたつぷり持ってるよ」

「ほう、ひよつとして瘴気ライターに携わっておられる…？」

「まあそんな感じかな。愛用していただいているようで」

「そうでしたか！是非ゆつくり見て言っつてください。お安くしておきますよ！」

そういつて店の奴隷を見渡すとざっと10人が首縄を繋がれておりぼろを纏っているのにたいして、同じ首輪をしているが店員のような格好をしているアベルと同じ歳ぐらいの女の子がいた。

「彼女も奴隷？」

「ええ、そうです。しかしこれは売り物ではございません。彼女は器量もよく頭もいいので店員の仕事をさせているのです」

「この奴隷は全部、店長さんのもの？」

奴隷たちの首輪についている名前を見ていて気付いた事がある。何人かは違う名前が書かれていたのだ。

「いいえ違いますよ。商品の管理と販売を委託をされているやつもあります。売れたらその代金から管理費と売り上げの一部を頂くといい契約です」

「なるほどな」

うんうん、頷きながら奴隷たちを眺めつつ、話しかけてみた。しかし、誰も返事をしなかった。

「お客さん、奴隷は所有者の問いかけにしか答えないよ。つてもちろん、ここに並んでいるのはちゃんと言葉が分かるし話せるからその辺は心配しないでいいよ」

「アベル兄ちゃん、旅してるんだからいくつか कोरोニー に寄ったんじゃないんか？どこでも奴隷は売っていると思うけど」

「ああ、そうだけどもとまった資産を得たのはこの कोरोニー に着いてからだからな、それまでは縁がなかった。たまに一緒になる連れも誰一人奴隷は所有していなかったな」

定住出来るほどの資産を持たなくても奴隷をもつ旅人は少なくない。荷物を持たせたり、戦わせたり、身の回りの世話をさせたり、強い妖魔と出くわした時に困にしたり、定住者よりもむしる旅人や冒険者こそ奴隷にその価値を見出している。

その為、戦力の少ない集落や、備えの甘い村なんかを襲ったり、集団から離れた子供や女性をさらったりして奴隷にする賊まがいの冒険者もいたりする。こういった輩のせいで、外から来た者への目が厳しいコロニーが多い。

「ところでこの子ひよっとして」

アベルは、店の置くで影になっている場所で丸椅子に座っている奴隷の女の子を見つけた。

「ああ、そいつですか、お察しの通り普通種です」

「やっぱり、しかし…」

「ええ、もう長くないですよ。いくら普通種でもここまで瘴気病が進行したやつを欲しがる人は誰もいません。瘴気ライターもすぐに使えなくなるでしょうし、割に合いません。頭も良いし幾らか魔法も使えるようなんですが、放っておくとそのまま妖魔に変化しますからね、そろそろ処分しようと思っただけのところですよ」

「よし、買います」

「ってええ？アベル兄ちゃん、買うの？いくらなんでもここまでひどいんじゃないよ？治らないでしょ？治らないよね？」

「お客さん、奴隷を扱ったことあんまり無いみたいだけど、もし処分する前に妖魔になって町に損害でしたら、責任は当然所有者が被るよ？まあ、病気の進行を抑える事はできるけど、そこまで価値があるのか」

「ふふ。もちろん分かっていますよ。で幾らで売ってくれます？」

そういつて、ポケットからガラを一つかみし、掌に載せたガラの山を店員の目の前に出した。

「お客さん、兎族でもないのにすごいガラ持ちだねえ。こんなにガラを持つているのにわざわざこの子を買うなんて。まあ、同じ種族だし珍しいから気持ちは分らないでもないけど。これだけあつたらもつといい普通種も買えるよ。…まあいいか」

そういつて、少しガラの小山を眺めた後、一粒つまんだ。いくら病気でもこの店長は謙虚すぎるとアベルは思った。

「まあ、そんなもんだらうね」
隣で見ていたパリスは納得した。

「奴隷つて結構高いものだと思つていましたが？」
「普通種だからさらに高額だが、さっきも言つたようにこれだけ病気が進んでいたらね。それにあなたみたいなガラ持ちならきつとまたここで買つてくれるだらうと思つているからね。先行投資つてやつかな」

「そうですか、ありがとうございます」
「おうおう、それよりもつと買つて行かないかい？それだけあればここにいる奴隷全部買えるよ？」

「今日のところはこの子だけでいいです」
「ふーむ。じゃまた来てくれ！あ、そうだ、ひよつとして普通種族が欲しいのかい？もしそうなら、なるべく仕入れるようにするけど。需要はあるけど、高価だから売れるあてが無ければあんまり仕入れないんだね。お客さんに買う予定があるなら積極的に仕入れるけど」
「そうですね、多分売つていたら買うと思ひます。でも必要なのはもう少し先かな、その時にワーカーとして大量に買おうかと思ひます」

「ほほう、なにか事業でも始めるのか？まあそれだけのガラがあればちょっとしたことができるだろうな。おう、入用があったら気軽に話してくれ、あんたいいお得意様になりそうだからな」

ニコニコ顔で右こぶしを自分の胸に軽く叩きつけた。

「ゼツフェルって言う。こちら辺でなんかトラブルにでも巻き込まれたら『奴隷店のゼツフェル』の親友だって言え」

アベルはなかなか心強い親友ができたなあと思った。

「さて、購入したからには、『奴隷の首輪』に書いてある名前を書き換えないとな。お前さんできるか？」

「どうやればいいんですか？」

「ふむ。まず余白にこの魔法のペンであんたの名前を書き込んでくれ。そのあとでここに書かれている名前をナイフで削る。それで譲渡完了だ。魔法ペンの使用は無料でいいぞ」

「わかりました」

「OK、これで正式にこの奴隷はお前のもんだ。多分すぐに処分することになるだろうけど、それまで大事に使ってやってくれ」

にやにやしながら親指を立てた。

「名前あるのか？」

アベルは今しがた所有権を得た奴隷に話しかけた。

「マキアです。主様」

「それじゃあマキア、着いてきてくれ」

そうして、マキアはアベルの後ろを歩き、店の外に出た。

すると、暗くてあまり見えなかったがほとんど全身に瘡気病が蔓延していることに気付いた。

「アベル兄ちゃん、流石にここまでひどいとは思わなかったね…」
「まあな」

そうして、何処にも寄らずにそのまま家に向かった。

すれ違う人がその末期の病状に驚くことも多かった為に、アベルは自分の着ていた分厚いフードを被せてやり、皮膚が一目に晒されないようにした。

マキアはかろうじて歩けはしたが、歩くたびに痛みを感じるようだったので、肩を貸して家まで連れて行った。

「ありがとうございます」

途中で別れて、アベルは住居に案内した。

「ここがいま住んでいるところだ」

2階建ての日干し煉瓦と檜の建具で出来た家。

「すごい。兎族のコロニーなのに」

マキアは感嘆してつぶやいた。

まあ、とりあえず中に入って。治療を始めるから。

そういうと、また肩を貸してベッドのある部屋まで連れて行き、そこへマキアを寝かせた。

「申し訳ありませんが、主様は私の体を見たらきつと興が殺がれると思います。それどころか瘴気病を移してしまうかもしれません」

「ははは、そんなつもりはないから」

「では、もしかしてもう処分されるのでしょうか？」

「なんでわざわざそんな為に買うのさ。違うよ。いまから君の病気を治すんだよ」

そう言って、瘴気ライターの上位互換、まだこの世に1つしかない瘴気灯を出した。

カチャリとボタンをスライドさせると暗い不思議な炎がとまった。反対側からは何かを吸いこんでいるようだ。

「これは俺が作った瘴気を吸収するマジックアイテムだ。上で灯っている炎は下から吸い込んだ瘴気を燃料に燃えている。燃えカスは人でも扱いやすい魔力と清浄な空気になる」

「…」

ヘキアは黙って聞いていた。言っていることは理解できるが、それを信じることは到底出来そうになかった。

しかし、アベルが瘴気灯の底部をヘキアの顔に寄せたとき、驚愕と歓喜と畏怖が同時に心を支配した。触れた部分から、ずつと感じていた強い痛みと痒み、しびれといったものが引いて行ったのだ。そしてその不快な刺激の穴を埋めるかのように暖かく気持ちのいい感触が広がっていった。

アベルはゆっくりライターの底部を動かしていった。ヘキアは心地よい感じが広がるのに身を任せていた。ほとんどしびれて表情を作るのも難しかった顔の神経も正常化されたが、あまりの気持ちよさに唇周辺の筋肉は弛緩しっぱなしで、よだれまで垂る始末だった。

「ほら、よだれを吹いて」

そういつてハンカチを口元に当ててやる。

「はっ、も、もうしわけありません。主様」

顔を赤くしているところを、手鏡をかざし自分の顔を確認させてやった。

「え…何これ…すごい」

そこには少しばかり頬に朱をさしたがわずかなくすみものこっていない美しい顔がのぞいていた。

「首から上はそこまでひどくないみたいだね。ほとんど後も残らな

かったよ。まあ、これで治りきらなくても魔法を使つて根こそぎ直すつもりだけどね」

「は、はい。主様は一体…」

「ちよつと恥ずかしいかもしれないけど、次は首から下ね、さあ上着を脱いで」

奴隷用の服はくすんだぼろのワンピースのような上着と膝から少し下で切れたぼろのズボンだ。

自分でワンピースをマキアは、いつもは見ないようにしている自分の体に目をやってやはり見なければ良かったと落胆し、ついで主様にそれを見られるのをとても恥ずかしいと感じた。

それまでは絶望し、自分の体も命も興味を持たず、体を精査する奴隷商人に対してなんの感慨も浮かばなかった。

しかし、今しがた奇跡を目の当たりにして体が奇麗になるかもしれないという僅かな希望を持たされた為に、同種族のそれも同じような歳の男を前にして失っていた羞恥の心を取り戻したのだ。

「はい。あの…お願いします」

そう言つて近くに脱いだ上着を奇麗にたたみ、再びベッドに横になった。程度の差こそあれ、首から下はほとんど全て瘴気病で変色し腐臭を放っていた。

奴隷店のゼツフェルの言つていたことは本当である。ここまで到達する前には大体妖魔化するか死んでいるものだ。おそらく、この少女の精神力が普通よりも高いのではないかとアベルは思った。

「それじゃあ」

瘴気灯の底部を心臓の近くにスツツと近づけた。暗く灯つた不思議な火は一気に燃え上がった。火が勢いづくと同時に同心円状に明るくなつていった。もとの肌色を取り戻し始めたのだ。肌色が広がっているように見えるがよく見ると、外側から中心にかけて細かい闇の粒を吸いこんでいるのが見える。それはまさしく瘴気そのものであった。

火の勢いが弱まったらずしらずというのを繰り返した。仰向けの状態から治療できる範囲が全て終われば次はうつ伏せになってもらい、同じように繰り返した。

マキアは生まれてこれまでこれほど気持ちのいい感覚を味わったことはなかった。いや、痺気病に侵されるまではずっとこの心地よさを味わっていたはずなのだ。

そのあまりの苦痛が日常化したために、忘れていた普通の感覚にめまいがするほどの心地よさを見出しただけなのだ。

「この分だと内臓もやられているだろうけど、痺気灯で治せる範囲はそこまで広くないんだ。とりあえず、最初は体に染み込んでいる痺気の絶対量を減らすよ。次は、下半身をやるから、ズボンを脱いで」

マキアは先ほどまで腕の関節を曲げるのも苦痛で、必要がなければほんの僅かの動作も節約するほどだったが、今は動かすことに凝り固まった筋肉をほぐすような気持ちよさを感じ、何でもいいから体を動かす口実が欲しいと思った。まだ下半身は治っていないが、上体を思いっきり曲げて、ズボンを脱ぎ、たたんで上着の上に載せた。無残な下半身に対する羞恥心よりも久しぶりに戻ってきた普通の感覚に感謝するほうに気持ちが傾きすぎてもう恥ずかしそうな素振りを見せなかった。

アベルは同じように少しずつ動かして治療を施していった。

もはや、痺気病であったかどうかわからないほど綺麗な体になっていた。1時間ほどかかったが、少なくとも表面付近の病巣は取り除いたとアベルも満足していた。

「さて、仕上げをやるよ。恐らくまだ内部も痺気が残ってるはずだ

からね」

そう言うと、アベルは、精神を集中させた。頭に術式を思い浮かべ色や形や概念を決まった順番に思い浮かべてそれが記憶から消えないうちに術式に当てはめていった。

両手に淡い紫の輝きを纏い、マキアの頭部らへんに触れ、そのまま少しずつスライドしていった。纏った光が強くなった箇所ではばらく止まり、またスライドしていった。

そうして、足の先までいったところで手の光は消えた。

「んんー、終わった。ふう。疲れた。瘴気を全部取り除いたよ。気分はどう？」

胸を通過したあたりでまた羞恥心がもどったマキアはまた顔を赤くしていたが、アベルの問いかけにそのまま居住まいを正した。

「生まれ変わったようです。主様」

「そうか、よかった。いろいろ話をしようと思うのだけどまずは着るものを用意しないとね」

「あっ……」

「女性用の服は無いから、俺の服を適当に使って。落ち着いたら調達しに行こう」

そう言ってアベルは近くのダンスから適当にシャツやズボンや上着を取り出しマキアの方に投げた。マキアはそれを拾いそそくさと身に付けた。

「とりあえずお茶でもどうぞ」

「ありがとうございます」

「君は普通種だよね？」

「はい」

「実は普通種のコロニーを探しているんだ。もし知っていたら場所

を教えてください」

もともとは普通種と接触してこの技術を伝え、繁栄することを目的に旅をしていた。行けども行けども普通種のコロニーを発見できず、今なおあり続ける普通種のコロニーの噂もほとんど聞かず、先に魔法が完成した為に、この兎種のコロニーを拠点に稼ぎ始めた。仕方がないので、1から新しい町を作る計画を練っていたところだが、辿りつけるところにあるならそちらへ行きかけた。

「私の住んでいたところは小さな村でした。突然の瘴気の嵐で村の住人はほとんど妖魔になってしまい、私を含む数人はそこから逃げ出したのですが、途中で冒険者につかまってしまいました、そのまま奴隷として売り飛ばされました。その場所もかなり遠くですし、おそらくもう村は廃墟になっていると思います。申し訳ありません」「ふーむ。それじゃあ、他に普通種のコロニーの噂は聞いたことない？」

「いえ。村はあまり他のコロニーとの接触はなく半ば隠れて暮らしていましたから外の情報はほとんど入ってきませんでした。奴隷になつてから聞いたことがあります」

普通種はその他の亜人種に狙われやすいため、残るのは隠れるようにして存在する小規模なコロニーだけだ。

残るほどひっそりと隠れているために見つけにくい。見つけにくいからこそ狙われずに残っているともしえるのだが。

「そっか。残念だね…」

「はい、お役に立てず申し訳ありません。主様」

「ま、いいや。俺もずっと探していたんだけどね、もう諦めた。というか、あきらめて自分で作ることにしたよ」

「自分で作る…のですか？主様」

「ああ、瘴気を浄化する機構を代々研究していた村に住んでいたんだ。あとすこしで実用化できそうなところで豚族の襲撃にあつてみんな奴隷になつちまった。で、俺だけ運よく逃げてそのまま旅を続けていたんだ。旅をしながらも研究を続けてね。旅の途中で完成させた。

この瘴気灯もさっきの魔法も全部その研究の副産物なんだ。メインは土地、空間そのものから瘴気を取り除くって方」

マキアは、アベルのすごさを味わっていた。自分に施された治療でこれ以上尊敬は出来ないというぐらい尊敬したはずだが、今の話を聞いて、それまで思っていた尊敬の念はまだまだ限界じゃないことに気付いた。

「主様は私の考えが及びもつかないほどのお方、どんな事でもお申し付けください。少しでもあなたの力になるよう努力します」
もとより奴隷なのだから、それは当たり前のだが、マキアは奴隷でなくても一生アベルに全てを捧げる気持ちでいた。

「そうだな、じゃあまずはお茶でも入れてもらおうか。この部屋をでてリビングを挟んだ向こう側が台所。リビングに移動してゆっくりお茶を飲みながら話そう」

「畏まりました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8701z/>

魔界パイプライン

2011年12月28日03時49分発行